

小津安二郎の「稚児事件」再考

星 乃 治 彦*

はじめに

映画監督小津安二郎は、1903（明治36）年東京市深川区亀住町に生まれるものの、1913（大正2）年3月父親の意向で、小津家の郷里であり母親の実家からも遠くない三重県飯南郡神戸村（現在の松阪市）等に10年間住み、ここで、その後の小津の人生を決定づける経験を積むこととなる。その中でも、多くの研究者が注目しているのが、「稚児事件」と呼ばれるものである。この事件によって、小津は停学・退寮処分に遭い、その後の小津の人生は決定的に転換した。

この問題に関して、定評ある『小津安二郎の芸術』を著した映画評論家佐藤忠男に言わせれば、ある美少年が上級生から盛んに手紙を受け取っていることが問題視され、校長室に次々と呼ばれた。「小津安二郎のために弁明すれば、当時の稚児さん趣味とはいうのは、必ずしも今日でいうホモ・セクシュアルほど深刻なものではない。男女の交際が厳しく禁止されていた戦前の中学生の社会には、異性に手紙を書くかわりに年下の同性に友情の手紙を書くといった習慣が、一部には伝統的であった。」⁽¹⁾

事件は、手紙を書いた程度で、「深刻」な問題ではなかったというのが、小津研究史の定説である。ただ、現在の観点から言うと、ホモ・セクシュアルが

* 福岡大学人文学部名誉教授

「深刻」ということはどういうことだろうか、という疑問は湧く。そこには、日本の伝統的家族像を描写した小津が「そんなこと」をするはずはないとする「弁明」が見え隠れするが、それが、「そうかもしれない」という想像力の展開を妨げているのではなかろうか。

小津が亡くなってからほぼ一年後の1964年12月5日、東京会館で、小津安二郎の「追悼会」が開催された。その「追悼会」の様子は録音されているが、この「追悼会」で小津の同級生吉田与蔵もこの稚児問題に触れている。吉田は、小津が仇敵と思っていた、事件当時の舎監槌賀安平の「よう世話した」⁽²⁾人物であった。

「・・・で、5年生になりました時に、われわれの学校に『稚児さん事件』というのが起こりました。いわゆる男色ではございませんですけども、上級生の者が下級生の見目麗しき美少年・・・に、ときたまラブレターなんぞを手渡して喜んでいるような態のものでございますが、たまたま不心得な生徒がおりまして、授業中に、その稚児さんから来た手紙を読んだのを発見されて、それがもとになって芋蔓式に、それぞれ今でいう検挙といえますか、みんな引っ張り出されました。幸か不幸か小津君もその渦に巻き込まれて、寄宿舎は追っ出される、無期停学は食うというわけで、結局、松阪のご両親のもとから中学校へかようことになったんであります。」⁽³⁾

ここでもやはり佐藤忠男と同じことが語られている。ただ、もし大した事件でもなかったのであれば、なにも追悼会でわざわざ言及する必要があるか。謎は深まる。むしろ、「宇治山田中学の事件は、ほとんどの伝記が一応触れているのに、真相を書いたものはないといってよく、曖昧なままで終わっている。今となっては、事件の究明も、おそらく不可能であろう。『下級生に手紙を書いた』ことというのが、ほぼこれまでの定説になっているが、そうだとすると、学校側が小津に科した停学処分は酷烈なものであった。しかもこの処分の結果、一学期の期末試験を受けることもできなかったのである」⁽⁴⁾という中

村の指摘に共感する。

事件の結果、小津は退寮処分に伴い自宅通いとなり、映画に没頭する生活が始まったことから、小津研究者田中眞澄あたりは、「いずれにせよ、追放は結果的に解放となり、彼を映画の世界へと走らせ、ついには製作の現場へ誘い込むことになったのだから、小津の人生にとって、槌賀安平氏は逆説的に最大の恩人でもあったのではなかろうか」⁽⁵⁾ という楽観的の評価が下されるが、現代的視点から判断すれば、16歳の小津安二郎少年にとって、事件後はむしろトラウマ的状况だったのではあるまいか、とも考えられる。

本稿では、小津安二郎が「同」「異」だったか、「あったか」「なかったか」という議論に直接的に回答を出すというよりも、膨大な研究史をベースに、⁽⁶⁾ 松阪での現地調査を踏まえながら、「男色」をめぐる歴史的コンテクストの中で、この稚児事件を位置づけるとともに、小津安二郎自身の歴史の中での意味づけを確認してみたい。

1. 寄宿舎という空間と「男色」経験

戦国時代あれほどの隆盛を誇った「男色」は、平和の中で、とくに天保の改革以降顕著に「衰退」していたとされるが、幕末維新时期になって蘇生した。花房四郎の先駆的研究によると、「明治維新の変革が旧制度の破壊であったと同時に、他の風俗習慣もそれに伴って一変した。……公然たる衆道は裁断されたが、再び古代のそれに復帰して個々の人間同志の秘密の寶となったのである。只、古代は僧侶と貴族の独占に近いものであったが、維新後はそれが一般化した。……九州地方は殊に甚だしくて、就中、薩南の健児たちは、今猶この風習が止まないさうである、厳密に云へば薩摩だけではなく、全国の青年を通じて、多少の差こそあれ、この風習は依然として撲滅されずにある。」⁽⁷⁾

たしかに明治期になると、近代的制度改革の進展に伴い、軍隊や寄宿寮、青年団など、男だけの空間が誕生した。とくに寄宿寮に関して、小津よりも40

年ほど年長にあたる森鷗外（1862-1922）は、明治10年代における自らの経験を基に、そこでの「男色」について次のように描写している。

「学校には寄宿舎がある。授業が済んでから、寄って見た。ここで始めて男色ということを知った。僕なんぞと同級で、毎日馬に乗って通って来る蔭小路という少年が、彼等寄宿生達の及ばぬ恋の対象物である。蔭小路は余り課業は好く出来ない。薄赤い頬つぺたがふっくりと膨らんでいて、可哀らしい少年であった。その少年という詞が、男色の受身という意味に用いられているのも、僕の為めには新智識であった。」⁽⁸⁾

鷗外の『キタ・セクスアリス』では、主人公金井自らも寮の先輩から声をかけられた。

「但しその親切は初から少し粘りがあるように感じて、嫌であったが、年長者に礼を欠いではならないと思うので、忍んで交際していたのである。そのうちに手を握る。頬摩をする。うるさくてたまらない。ある日寄って見ると床が取ってあった。・・・そしてとうとう僕にこう云った。『君、一寸だからこの中へ這入はいって一しよに寝給え』

『僕は嫌だ』

『そんな事を言うものじゃない。さあ』⁽⁹⁾

たしかに、男だけの空間で、「ラブレター一本見られても退学だし。花柳街に踏み入っても放校処分になる怖れがあるとすれば、女性の代りに比較的安全地帯の感がある少年を選ぶのは当然のことと云はねばならない」⁽¹⁰⁾ という状況の下で、機能的同性愛とも呼ばれる代償的同性愛が展開されていたとしても不思議ではない。ただ、それは、女性を排除した空間という強いられた環境で、捌け口を求めただけとも言えない。特殊な文化が生成していた。

「つくづく繰返される當年の思ひ出中に『賤の苧環』なる、一篇の歌物語がある、『男色界のバイブル』と言ったら、直ちにそれと名指されるほどの呼物で、當時の學生間には寄ると触るとその朗吟が始まったものであった」⁽¹¹⁾ と言われ

るある種の文化が形成されていた。この『賤の苧環』に関しては、森鷗外も書いている。

「硬派は可笑しい画なんぞは見ない。平田三五郎という少年の事を書いた写本があって、それを引張り合って読むのである。鹿児島塾なんぞでは、これが毎年元旦に第一に読む本になっているということである。三五郎という前髪と、その兄分の鉢髻奴との間の恋の歴史であって、嫉妬がある。鞘当てがある。末段には二人が相踵いで戦死することになっていたかと思う。これにも挿画があるが、左程見苦しい処はかいてないのである。」⁽¹²⁾

現在では「愛情」「恋愛」と表象されるクィア空間が広がっていたことが分かるが、そのバイブルともなった写本こそ、『賤の苧環』であった。『賤の苧環』の舞台は豊臣時代。実在の薩摩武士平田三五郎宗次と吉田大蔵清家を主人公とする、二人の武士道と男色を称揚する内容である。成立は不明瞭なことも多く薩摩方言が多用されているところから薩摩で、18世紀から19世紀にかけて成立したと考えられる。明治17年、自由党系小新聞『自由燈』に連載されて以降全国的に知られるようになった。⁽¹³⁾

話は、島津家家老の息子美少年平田三五郎は暴漢に襲われていたところを吉田太蔵に救われたことを契機に、二人は惹かれ合い、義兄弟の契りを結ぶところからはじまる。二人の関係を嫉妬する陰謀、大蔵の朝鮮参陣などを経ながら二人の関係はさらに強くなっていく。一五九九年宗次は清家と庄内合戦に出陣するが、大蔵が先に討ち死にする。三五郎は義を貫きあと追い討ち死にする。二人の関係は、愛欲ばかりではなく、義理、廉直、剛毅であったとして締めくくられる。⁽¹⁴⁾

とくに硬派学生は、「新しい西欧化の風潮を軟弱と反発し、男どうしが固い契りで結ばれ切磋琢磨し、信義を貫き死を共にすることで愛を完結する吉田・平田の関係と生き方に憧れた」と伊牟田などは評価するが、⁽¹⁵⁾ 近代法制度の整備に伴う女性の処女性の重要視、男女の隔離と並んで、明治になってからの

「男性性」の強調は、近代的制度とくに軍隊との関係性もあると考えられる。

こうした明治10年代の寄宿舎を中心とする世界における「男色」に関心を示しつつも、鷗外は当事者にはならなかった。ところが、それから30年ほど後に生まれた文学者たちは次々と、特に寄宿舎空間で経験した自分のクィア体験を公然と言説化するようになった。

たしかに、中には河岡潮風(1887-1912)のように、1909年「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵する」⁽¹⁶⁾と気を吐く文人もあったが、陸軍軍人小説家綿貫六助(1880-1946)⁽¹⁷⁾、初代文化庁長官も務めた小説家今日出海(1903-1984)など、クィア経験の言説化には枚挙に暇がない。小津との関係から言うと、特筆すべきは、里見弴と志賀直哉であろう。

後に鎌倉で小津と深い親交を結ぶ里見弴(1888-1983)にしても、1912年大正2年『白樺』4月号から7月号に掲載された1900年前後を背景とした自伝的小説『君と私』では、14歳の春休みの経験として、「坂本」という志賀をモデルにした「君」を登場させ、「君に対して男同志の戀を感じてみた」かも知れない、「何しろその頃は一般学生の間に男同志の戀がヒドク流行ってゐたし、私もそれに浮身をやつしてゐた。近頃その時分の日記を披いて見て驚いたくろ、あらゆる頁に同性に対する愛情が慇へられてゐる」と告白している。⁽¹⁸⁾

ところが、これに対してモデルとなった志賀直哉(1883-1971)が、不満を白樺7月号に吐露した。「内容が余りに無意味であまりに貧弱な」作品の「副主人公」の地位に甘んじなければいけなかったことに「不服を云はないではゐられない」という「モデルの不服」であった。ただ、想いを寄せられたこと自体に対して特段言及はないし、実は志賀自身1911年の『濁った頭』で「男同志の恋」を叙述している。⁽¹⁹⁾ 志賀とも小津は深い親交を持っていた。

里見と同じ年に生まれた菊池寛(1888-1948)も負けていない。菊池寛は、中学校5年生の時4級下の渋谷彰に対して、「私はあなたと。兄弟の約を結び。僕はあなたの兄になることを誓ひます」(明治41年1月8日)「My dearest

favorite, I love you very much/You are my life and I am your life」などと熱烈な「恋文」を送り付けたかと思えば、第一高等学校3年の時、後に日本共産党指導部にのし上がっていく佐野文夫に想いを寄せ、マント事件と呼ばれる盗難事件を肩代わりして、1913年第一高等学校を退学処分となっている。⁽²⁰⁾

「男色」は文学者に限ったことではなかった。アナキスト大杉栄（1885-1923）になると、結婚、家庭、恋愛に関する既成観念はさらに根底的に否定される。居候中に堺利彦の義妹で深尾韶と婚約していた堀保子を強姦することで結婚するものの、入籍はせず、同時に後の日本社会党の活動家神近市子に続き、さらには女性運動家伊藤野枝とも愛人関係となって、何人かを妊娠させた。ポリアモリーと考えられる大杉だが、ただ並行して名古屋陸軍幼年学校時代を中心に画家中村彝の次兄中村中と恋仲にあり、修学旅行での下級生への性的な戯れに対して禁足30日の処分を受けている⁽²¹⁾。パンセクシュアルという範疇と言えるかもしれない。大杉は、性政治の分野でも既存観念にとらわれることはなかった。

単に「機会的」とも「同性愛」とも言い切れない、こうした様々なクィアな形態の「恋愛」関係は、巷でも感情の激高から、時として殺人事件に発展することもあった。熊本に本社を置く『九州日日新聞』の大正2年7月20日号は、稚児をめぐる中学生の殺人事件を報じている。

福岡県豊前築上郡の県会議員次男で、広島市のある中学校に通う5年生のA（21歳）は、同校3年B（16歳）という「美少年と義兄弟の約を結び居りし」。大正2年7月15日夜今度はC（21歳）がBを「寄宿舎より連れ出し舎後の池畔にて男色を迫りしも応ぜざるしかば、散々に殴打したる」。それをAが聞き、「大いに立腹し、詰問せんと・・・学校裏の池畔にてCに出逢ひたれば、早速談判を初めCを殴り付けしが、Cは予て懐中せる刃渡五寸余の短刀を引抜き、Aの胸部と腹部の間に突立て引き廻したれば、長さ三寸余に及び大動脈を搔切りたる重傷に、校長等も馳付け手当せしが、間もなくAは面の袋に入

れて所持し居りし我短刀の血汐に染まりしを片手に握りし俣絶命したり。』⁽²²⁾
命を懸けた恋愛関係である。

時代がさらに10年ほど下ると、小津とほぼ同世代の文人である川端康成(1899-1972)に行きつく。彼は実生活で伊藤初代から婚約破棄を告げられ、茫然自失となった翌1922(大正11)年、『湯ヶ島の思ひ出』をしたためた。400字詰め107枚のうち38枚は『伊豆の踊子』に発展し1927年に刊行された。だが、後日川端本人に言わせても、「踊り子よりも同性愛が私に心深いものであった」⁽²³⁾らしく、『湯ヶ島の思ひ出』の残り大半は、「清野」(本名小笠原義人)を主人公とするもので、後になって、川端は、この部分と、その後小笠原との間で交わされた手紙、1916年から23年頃の日記、その後の回想などをまとめて『少年』を誕生させている。

実際の世界では、親を亡くし、天涯孤独となった川端康成は、同級生の正木との関係を結びながら、1915年に寄宿舎に入り16年からは4人部屋の室長ともなった。そこに入室してきた小笠原にも川端は惹かれることになり、小笠原からも無垢な愛情が寄せられ、寝床で互いに抱擁し合って寝るまでにいたった。⁽²⁴⁾「お前の指を、手を、腕を、胸を、頬を、臉を、舌を、齒を、脚を愛着した。僕はお前を恋してみたと言ってよい」⁽²⁵⁾と表現される小笠原との関係は、川端自ら「私が人生で出会った最初の愛」、「初恋」であったと言うものであった。⁽²⁶⁾1899年生まれの小笠原が寄宿舎で「初恋」に堕ちたのは、1903年生まれの小津とほぼ同時代であった。ただ同じ時期現実社会では、こうした微笑ましい「初恋」ばかりではなく、社会問題にまで発展するような動きも見られた。

2. 「不良」学生問題と新聞報道

衛生問題を広く扱う新聞『衛生新報』は、明治39年2月10日号2面に「上級強姦を強ゆ」という見出しで、金沢中学校の一生徒の投稿を載せ、「小生事14歳の時より世のいまはしい獣慾の犠牲となり今年迄4ヶ年間1ヶ年70回以

上彼等の辱めを受くる身となり今では肛門は活約力なく……」と、中学生が上級生からの強姦被害を訴える投稿を掲載している。この投稿は、続けて精液が腸内に入る結果の害や、教育者が生徒が女色に耽るのを恐れてか、可憐な少年たちが不良生徒に暴行されるのを校風とでも云うように大目に見ているような有様だと嘆いている。⁽²⁷⁾

明治後期になると、「悪少年」「不良学生」「悪書生」という言葉が見られるようになる。明治39年、神風連と称する団体を組織していた21歳の不良学生が、自分の借りている商家の二階の座敷で不良仲間8人が集まって送別の酒宴をしている所に、何も知らずにやってきた17歳の学生を二階に引き上げて酌をさせ、脅迫して無理やり行為に及ぶという事件も起こっている。⁽²⁸⁾

1910年紙面に登場する『鬼鉄一派』の罪状は鶏姦、強盗が主で、千人以上が被害に遭い、彼らは稚児を占有、あるいは共有していたと書かれており、赤坂近辺の小学校が被害に遭っていたと報道されている。⁽²⁹⁾ 長崎では、50人ほどの小学生の悪少年団「トンネル組」は、商店から商品を盗むだけでなく、学校帰りの少年を待ち受け、上流階級や商家の子弟に暴行に及び、鶏姦を行なっているという記事も掲載されている。⁽³⁰⁾

こうした学生たちは、「第一鶏姦、第二パクリ、第三女釣り、第四に悪戯、第五窃盗の五種にして其内最も不倫にして而も学生墮落の最大原因を為すものは鶏姦なり」⁽³¹⁾とされるまでであった。彼らは通常徒党を組んでいた。「明治の終り頃には、美少年を誘拐して野獣を遂げる不良團體が各所にあった。名古屋、大阪の成美團、天下茶屋のスミレ倶楽部、長崎のトンネル組、神戸のバラケツ組など始末に終へないものであった。」⁽³²⁾

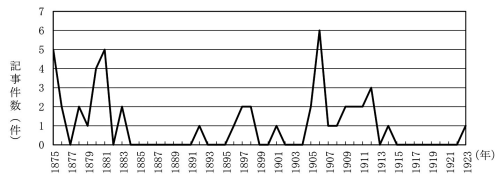
1912年6月14日『朝日新聞』は、「東都30万余の学生及び子女ある父兄の注意の爲め」として、1団体30人から300人、平均60人とされるメンバーを抱える51団体の名称、勢力範囲、人員数を公表している。1905年3月16日朝日新聞東京6面では、「芝を第一とし、麻布、麴町、神田等」地域も特定さ

れている。⁽³³⁾ かなり、大きな社会問題としてとらえられていることをここで知る。

のちに小津の「稚児事件」が新聞報道されたという事実を知る時、果たして当時新聞が、どういった問題を、どのように報じようとしていたのか、は「稚児事件」の問題性を考える時、重要と考えられる。その点を斉藤と田中が各々分析している。鶏姦報道自体の報道はそれ程多くない中で、まず田中は明治初期の新聞分析を手掛ける。

注 「ヨミダス歴史館」と「聞蔵Ⅱ」において、「鶏姦」、「同性愛」、「ホモ」というキーワードで検索して浮上した記事のうち、鶏姦または肛門性交に言及する記事をグラフ化したもの。連載小説は除く。

■図1 鶏姦に関する新聞記事数（『読売』と『朝日』の合計）^注



： 斉藤：25 頁

1872（明治5）年10月20日付『横浜毎日新聞』は長崎で起こった事件を取り上げている。ジョンソンという「平素暴行多く」「醜業を為す」外国人が、Aという貧しい日本人書生を襲い、抵抗しようとしたその書生がジョンソンを殺害した事件や、1875（明治8）年9月20日『読売新聞』朝刊が報じた、5人の男性が、男児を襲い、失敗して騒ぎになったので逃げた挙句に切腹したという事件を拾い上げながら、それら明治初期における報道が、鶏姦行為そのものを事件として扱うのではなく、『法』への違反性を強調するために『旧習』と『開化』、『非人道』と結節した言説」として「鶏姦」は使用されていた、という結論に至る。⁽³⁴⁾

斉藤はそうした傾向が1905年以降変化したことに注目する。斉藤は、「鶏姦」が論じられる件数自身は全体として少ないものの（上グラフ）、その中でも、1905年以降とくに「不良学生」問題と抱き合わせて「鶏姦」が論じられるよ

うになった、とする。とくに1905年から1914年の新聞報道の特徴として、①「鶏姦」が「暴力」、「犯罪」と見なされるようになった②その上で、3つの局在化が進んだと指摘する。それは、1. 「鶏姦」が不良学生にほぼ限定されるという「鶏姦学生化」、2. それも個人ではなく、集団行為とみなされる「集団としての局在化」、そして3つ目の局在化として指摘されるのが、3. 特定の地域に「鶏姦」が偏在する「地域としての局在化」である。⁽³⁵⁾

実際に1920年小津が関与した稚児事件を報じる新聞は、斉藤が指摘する3つの局在化のうち、①学生の、②集団行為であって、強制を伴う「不良行為」というかなり深刻な問題として報じている。そこで報じられる「男色」は、明らかに手紙を書いた程度の問題ではなかった。

3. 「稚児事件」の外堀

伊勢神宮がある「神都」伊勢市に位置する県立中学である宇治山田中学校は1899年に三重県立第四中学校として創立され、小津が在学中の1919年在学中に宇治山田中学校に改称した。明治42年に創立10周年を記念して制定された校歌は、山田耕作が作曲に当たり、歌詞は修身を担当していた小野寺晤朗によるもの「万民仰ぐ神霊の地に / 文武を励む五百の健児」で始まる伊勢神宮の「神霊の地」であることを誇りとするような中学校だった。⁽³⁶⁾

ただ、このように学校全体としては、厳格な保守的中学校で、1980年代中曽根康弘首相の側近で、中曽根派のプリンスと呼ばれ労働大臣、内閣官房長官、自民党国会対策委員長をも歴任した大物政治家藤波孝生、初代一橋大学学長中山伊知郎のような人材を政財界に送り込んではいるが、他方で、小津も含め、むしろそれに馴染まない人物の中からも逸材が散見される。

同じ中学を明治38年（1905年）に卒業した江口渙は、東大進学以後文学界で頭角を現し、小林多喜二や宮本百合子の葬儀委員長も務めるほどのプロレタリア文学の中心的人物に上昇するが、江口の処女作で出世作ともなった小説

『赤い矢帆』にも、小津の出身中学は登場する。

また、小津より4学年上にいた風俗研究者岩田準一などは、中学卒業後に竹下夢二、与謝野晶子・鉄幹夫婦と交流を結び、その後鳥羽に戻って江戸川乱歩と男色研究を競ったが⁽³⁷⁾、在学中は、学校からの許可が必要だった映画館・劇場での立ち入りも変装してやってのけ、松井須磨子と楽屋で面会したことを級友に自慢するような兵だった。⁽³⁸⁾

先ほど、1964年12月5日に開催された小津の「追悼会」に登壇した、小津の同級生吉田与蔵などに言わせれば、「学校は今でいうならば、おそろしく封建的な中学校でございました。夜間外出は一切禁止、飲食店は行ってはならぬ。映画演劇の小屋へは入ってはならぬという厳しい中学校」だったらしい。⁽³⁹⁾

小津の入学当時、第3代校長は黒金泰信が務め、1918（大正7）年9月から第4代中村寅松に代わった。中村は1887（明治11）年生まれで、東京帝国大学文科大学哲学科卒業後、長野、島根、栃木、台湾での教職を経て、三重県立第四中学校校長に就任した。⁽⁴⁰⁾ 風紀に厳格な校長だったらしく、学校中がパニックに陥った。映画評論家佐藤忠男によれば、中村校長は「それまでとくに問題もなかった学校を徹底的にかきまわし、事件後間もなく第八高等学校の教授に転勤していった」と厳しい評価を与えているが⁽⁴¹⁾、中村校長が第八高等学校（名古屋大学の前身）の生徒監として転任した時期は、「稚児事件」の直後1920（大正9）年8月であり、事件がそこには絡んでいると考えられる。

ただ、事件で大きな役割を果たすのは舎監の樋賀安平であった。樋賀は、1895（明治19）年兵庫県淡路島三原郡南淡町に生まれ、1909（明治42）年広島高等師範学校を卒業している。奈良県に就職した後、大正3年から昭和3年まで宇治山田中学校へ赴任し、その後三重師範を経て母校の兵庫県淡路島三原高校に勤務した。「一、勉めて自ら研究せよ 一、精密に観察実験せよ 一、性格に思考せよ」をモットーにした教育者であるとともに、「ツチガマレ

ゴケ」「ツチガシッポゴケ」等の冠された新種のコケを発見した生物学者でもあった。⁽⁴²⁾ 1956年には教え子たちによって三原高校に槌賀研究室が設けられ、今でも槌賀氏が採集、発見した貝類、コケ類などの標本が陳列されている。槌賀の銅像も設置され、1965年には喜寿を祝う文集まで刊行された。その背文字は、兵庫県立洲本中学校の同じ明治39年卒業で、労農派マルクス主義の代表人物東大教授大内兵衛が筆を振るった。

喜寿を祝う文集には、小津と同じ大正10年の卒業生の感想文は寄せられていないが、それより1年下の大正11年卒業で、1965年時点で大阪八尾市の中学校校長を務めていた角藤市は「個性豊かな一本筋金の入った先生」という標題に記し、「一言にしていうと『こわいが几帳面な信念の先生。』毅然たる態度と、学問を熱愛して、隠居して人生の夕暮れを静かに楽しんでというお年になられた今日も、研究を続け生徒の指導に当って倦まれない先生こそは、人間の指南番として、高い尊敬と無限の感謝をささげる次第です」⁽⁴³⁾と賛辞を寄せ、その一つ下大正12年卒業で1965年当時愛知県教育研究所に勤めていた積木倫一は、「その頃、先生は30歳そこそこの御若さであったわけですが、私たちには誠にえらい先生であり、こわい先生でありました。・・・こわい先生であり、時にはケンコツで頭をなぐられたりしながらも、また、それだけ親しまれ、心にかようものを、誰もががだいていたわけでした」と賞賛している。⁽⁴⁴⁾

高等小学校時代に柔道で大腿骨骨折し、以来独特の歩き方になって、当時「カニ」というあだ名の厳格な槌賀は、宇治山田中学でも宿題をしてこないといつも立たせ、放課後、学校の庭の掃除をさせた。小津はこの先生を嫌った。⁽⁴⁵⁾ それに、同級生が小津を偲んで懇談している場では、厳しい槌賀先生とは別の顔が回想される。

「中井：ただね、僕も世話になったけどね、槌賀先生てのはね、非常にねえ、小津の理屈から言うと、品性がいささか・・・。

慶光院：そういう点はあったかなあ。

中井：ウム。

奥山：たとえばね、吉田が世話していたっていうけどね、物をねだりに来るんですよ。

中井：ウム、そうそう、そういう点があったね。

奥山：耳が遠いからね・・・補聴器の世話せいとかね。

中井：そういうのはまた、オツセンセイはね。

奥山：嫌いやろ、それからあの三原のさ、女学校へ行って、で、自分の何か、こう書くわな、そうすると寄付してくれ—そういうことを言うてるやろ。そういうことを聞くとね。僕もいややったね。絶対。』⁽⁴⁶⁾

歴史の逆説だが、小津が退学させられずに済んだのは、樋賀がこうした吝嗇で、拙い側面をもっており、そこを小津の父親寅之助に突かれたからかも知れない。

一方、小津にとって宇治山田中学校は、「・・・その中学校の校風はどちらかといえば、表面上の格式を重んじていたため、非常に堅苦しいものであった。したがってそういった環境の学校に学んだ僕にとって学校生活での楽しい思い出はあまりない。学校の先生にもあまり好意が持てなかった。学問的な意味での敬意は払えたが、人間的には親しみが持てなかった。しかし友達はたくさんいた」⁽⁴⁷⁾ というものだった。

入学と同時に柔道部にも入り、5年生の時には小津が県大会に出場して、農林学校の選手を相手に勝ち、「小津の勝は、全く段違ひで立派だった」と宇治山田中学校校友会の記録には記載がある。⁽⁴⁸⁾

小津の側にも前兆が現れていた。親友の置塩は小津に関して、「こうして3年生ごろまでは平凡にうち過ぎましたが、4年生ごろから時々寄宿舎の掟を破ったり、クラスの音頭を取って騒ぎを起こしたり、かくれて映画をみにゆくようになりました」⁽⁴⁹⁾ という変化を指摘している。小津は勉強好きではなかったが、それでも、中学校4年まではクラスの中で、中の中くらいの成績で推移

していた。ところが、4年になって変調をきたすようになり、酒を飲んだとか、いわゆる「不良行為」も目に付くようになり、成績も低迷するようになった。

「稚児事件」の舞台となる寄宿舎は、学校の敷地の北東の一角にあって、校舎とはつながり、雨の日でも傘を使わずに教室に行けた。寄宿舎生を「舎生」、自宅から通う生徒を「本校生」と呼んだ。寄宿舎の生活は6時起床。小遣いが鐘を鳴らして回った。とくに柔道部の小津にとっては、柔道の寒げいこがこれから始まる憂鬱な鐘としてとして、「地獄の鐘」と呼んでいた。起きて身支度、朝食、それから授業始まりまでの1時間が勉強時間。昼食は寮に入ってとった。午後の授業が終わると、5時の夕食まで自由時間。食後6時から9時までが自習、10時消灯。夜3時間の自習時間には1時間ごとに舎監が見回った。「寄宿舎の中には、厳格な規律があり、下級生は上級生に絶対服従であった。下級生は上級生の布団のかたづけ、靴磨きもさせられ、風呂は上級生から順に入った。上級生は『様』づけで呼ばなければなら」なかった。⁽⁵⁰⁾「絞り」も行われた。これは、上級生が深夜に下級生をたたき起こし、正座を命じたうえで、気合を入れるというものである。1918（大正7）年3月10日の小津の日記には、日曜日「嵐を冒して4年生の人の菓子を買（ひ）に行く。実につらし」⁽⁵¹⁾とある。

小津もこうした「秩序」の中において、4年生くらいから後輩いじめを始めた。級友で寄宿舎でも一緒だった中井助三の回想によると、「下級生にことさら威厳を示した」⁽⁵²⁾ということだし、7年後輩の手記によると、「各室の広さは21、2畳ぐらいだったと思う・・・小津先輩には、1年生が入ってくると部屋の畳の目数を数えさせるという悪趣味があったというのである。ご本人は良い気持ちだったかも知れないが、命ぜられて逆らえない1年生は目がかすみ頭は痛くなっただろう。遅れて入舎してよかった、と思ったことであった。」後輩受けはすこぶる悪かったようである。⁽⁵³⁾小津自身が当時の自分を「乱暴者」と呼ぶ所以であろう。

4. 稚児事件

1920（大正9）年7月26日付三重県版『読売新聞』は、25日名古屋特電で、次のように報じている。

見出し：「下級生を威圧して弄びて

中學生四名退校

他九名は停學処分さる」

記事：「三重県宇治山田中学校にて上級生は下級生を圧迫して男色を行い居る事發覚し今回 A 校長は、4年生 B 外4名に諭旨退校、4年生 C 外9名を3年間停学処分に附せり」⁽⁵⁴⁾

ただ、この『読売新聞』の報道は、全体の分量が少ないうえに、見出しは「退校四名、停学九名」となっているのに、本文ではその人数が各々5名と10名になるなど、不正確な記述も見受けられ、事件の詳細はほとんどわからない。

『中日新聞』の前身となる『名古屋新聞』は、1920年7月26日付で、同じ事件をより詳細に報じている。その見出しは「山田中学に男色／五名退校十名停学／県当局は絶対斬る事無しと言ふ」とものものしい。

記事は、「宇治山田中学校内に男色行はれたる事發覚し、今回 A 校長は、4年生 B、C 外三名を諭旨退校、4年生 D 外九名を三日間停学処分となし一段落を告げたり。上級生は下級生を圧迫して醜交を續け居たるものにて A 校長が進退伺いを提出したりとは無根なり（。）右につき縣当局が一切之を知らず絶対斯かる事なしと E 學務課長の否認せるは餘りの事にて呆れて物が言えず」となる。⁽⁵⁵⁾

まず、ここで使われている「男色」概念について、この事件より少し前1900（明治33）年、中央看護婦会から出された『男女生殖健全法』の中の『男色に就て』では、次のように規定されている。「男色は已に古代より存在し、殊に以前に盛行せしものたり。之に進取的と受動的との二ありて、前者は淫蕩男子が女子の膺の代りに他の男子殊に少年の直腸を用ゐ、肛門よりして其の男

根を侵入せしむるをいひ、後者は然せらるる者をいふ、之を女色に對して男色と云ひ、又鷄姦と云ふ⁽⁵⁶⁾。つまりここでの「男色」は、直截に肛門性交と限定されており、新聞もその意味で書いていると考えられ、手紙を書くなどの行為ではない。男色行為があったと報道されるということは、概念上、肛門性交があったと理解するべきであろう。

また、この名古屋新聞の記事によると、その男色行為は、上級生が下級生を「圧迫して」行われたものであり、醜行ではなく、「醜交」が繰り返されていた。この新聞記事によれば、それは中村校長の進退問題にまで発展してもおかしくないものだと読むことができる。問題を県当局が承知していないというのは、「呆れて物が言え」ない、ということは、県レヴェルの問題であるということであろう。きわめて深刻な問題だったと考えられる。

小津の生涯の友人でのちの京都駅長奥山正次郎も、この件に関しては、しどろもどろで齒切れが悪い。

「あれは・・・もう、その・・・あんまりさだかじゃないんですけどね。たいしたことじゃなかったと思うんですが・・・なんか・・・あの頃、下級生に手紙を出したとか何だとか、そんなことがひっかかったわけです。そして、何人かおこられたわけですけど・・・。彼はたまたま寄宿舎におったもんですから、舎監から相当こっぴどくやられて、しかも停学だったか謹慎だったかもはっきり覚えてませんが試験前でしてね、一学期の。だから学期試験を受けないで夏休みに入ったと思うんです。」⁽⁵⁷⁾

とくに重要と考えられるのは、小津と最も仲が良かったと同級生が口をそろえる⁽⁵⁸⁾ 置塩高の次の手記の記述である。「この事件については、後日彼と話し合ったことがないので、真相を私は知りません。事件そのものはさしたるものではなかったらしいのですが、彼はとにかく（中略）処罰を受けることになりました。」⁽⁵⁹⁾

つまり事件に関して小津は最も信頼していた置塩にも話をしていない。そう

だとすると、「手紙云々」ということは誰から、ないしはどこから聞いたのだろうか。それも、友人たちの言い分が一致していることは不思議である。

そうこうしているうちに 当時離れた鳥羽にいた男色研究者岩田準一の耳にまで事件の様子は達した。

「・・・夜又〇来た T、〇も誘って海岸を散歩して別れた。帰って『同性愛に対する処置並びに解決』と云ふ一文（18枚）を12時までかかって、一気に書いた。これは此間 山田中学に起った15名の退学事件に関して自分の意見の一端を述べたものである。」

興奮は岩田にまで伝わっていたというから、その波及効果は尋常ではない。⁽⁶⁰⁾

おそらく宇治山田中学校は大きく動揺していた。いろんな噂が飛び交い、混乱していたと考えられる。26日には新聞報道がなされていた。「どうなっているんだ」と責任追及が始まっていただろう。校長は何しているんだ、県はどう対応するんだ、という声が新聞報道から推察できる。学校側としては、事態を取捨するために何か手を打たなければならなかった。生徒たちが動揺しないように、赤裸々な事件の実態が語れないとすれば、当たり障りのない内容をまずは生徒たちに伝える必要があった。「手紙云々」はこうして生まれたと解釈する方が自然であろう。「手紙云々」といった卒業生たちの言い分がほとんど一致しているのは、学校側が流す統一見解の存在を予感させる。従って「手紙云々」は、説得力に欠ける。そうした学校当局側ないしは県自体も関与していたかもしれない情報で判断することはできない。

こうした情報に汚染されず、直接小津の父親寅之助とのやり取りをしたのは、当時神戸にいた安二郎の兄の新一であった。その意味で、この新一証言が、客観的で、史料的な価値としては最も高い。事件の直後慌てた父親が兄の新一に連絡を取っている。新一は後にその模様を次のように証言する。

「私もね、おやじの手紙なんかでそういうことを聞きましてね、どういうわ

けで、退学にならなきゃならないのかって、いくら聞いてもそのわけを話してくれなくてね。ようやく何か話したら、鹿児島の方ではやっている何とかって言うものだって、おやじさんもよく知らない。ははあ、こりゃ稚児さんの事かなあって思ってね。私それで合点がいったものでしたけどね。』⁽⁶¹⁾

ここでは手紙事件とは言われていない。新聞報道とほとんど矛盾がない。井上和男が1983年製作された『生きてはみたけれど・小津安二郎伝』の作成の過程で小津新一に取材した時にも新一は次のように発言している。

「—何か、もう退学ってのをお父さんが色々奔走して・・・

小津：そうでしたね。おやじが呼び出されましてね。連れて帰ってわけで、槌賀って舎監でしたけど、これに、さんざん言われたんですけど、おやじはもう、頼む一方で何とか勘弁してくれって頼んだんですけど、槌賀先生が勘弁してくれないってわけですよ。それで、副舎監の田中先生とかがね、非常に温厚な方でしてね、その方におやじが三拝九拝しておねがいたら、この方がね、そりゃもっともだから、私も一度その舎監によく話をしますから、まあ今日のところはお引き取りくださいとかなんとかっていうことで引下がって来たと、あとでおやじから聞きましたけどね。その結果、ま、放校ってことにはならなかった。

—それで松阪の自宅通学になられたんですね。

小津：おう。自宅から通学してました。これはね、もう、期間としちゃそう大した・・・卒業間近だったんでしょうかね。

—3カ月かそこら・・・。

小津：そうですね。多分そうだったと思います。・・・

—一人だけじゃないみたいですね、その退学事件ってのは。

小津：ああ、そうですね。あれはなんていうか、仲間があって面白いんでね、そんなその仲間が寄ってそういうことをしては自慢したりなんかしてたんでしょう。』⁽⁶²⁾

小津新一の証言によれば、巖と許そうとしない槌賀、ただただ必死に許しを請う寅之助、間に入った副舎監田中。副舎監田中が説得したとしても、それほど簡単に槌賀は折れなかったことはわかる。こうした膠着した構造がありながらも、出てきた結果は極めて小津安二郎にとっては「穏便」なものであった。とくに安二郎は最上級生で、主犯格であったに違いない。上下関係の構造上、4年生が退学処分にあっているときに、5年生の安二郎は冤罪ということも、この間の寅之助の動き、新一の発言を見ても、可能性は低い。

むしろ可能性が高いと考えられるのは、必死な寅之助が、槌賀の吝嗇で、拙い性格に付け入ることであろう。先ほどの同級生たちの対談にも出てきたように、安二郎は槌賀の弱点を承知していたわけだから、そのことは父親に伝わっていたことは大いに考えられる。青ざめて必死の父親だと、新聞社にも名前が出ないように工作することも考えられよう。その成果で、安二郎の穏便な処分が下されることとなった、とするのが妥当と考える。たしかに小津安二郎は、1学期の試験は受けることはできなかったが、「退学までにはいたらなかった。父の寅之助が学校に謝まりに行き、副舎監にとりなしを依頼して、9月の2学期から、ふたたび学校に出ることを許されたのである。しかし、舎監長によって、寄宿舎を追われ、松阪の家から通学せざるを得なくなった。」⁽⁶³⁾

おそらく父親寅之助はほっと胸をなでおろしたに違いない。ことの仔細は誰も知らず、曖昧に解決が図られたのであろう。唯一すべてを知っていたのは父親の寅之助であった。

中村校長は事件直後の8月に宇治山田中学校を去り、9月には後任の前田麓樹校長が赴任してきている。この校長に関して小津の日記には「校長は仲々人のよい方である、寛大であるのが何よりよい」⁽⁶⁴⁾ という記述があるので、中村校長の厳格路線から中学校全体の方針が修正されたことがわかる。

5. 後遺症

安二郎にとっては、その後も余震は続いた。どうだろう、16歳か17歳の高校生が、いきなり「事件」を起こし、受験前の5年生の重要な時期であったにもかかわらず、減じられたとはいえ、停学処分となり、7月19日から24日までの1学期末の試験も受けられず、寮も退寮処分になったとしたら。「これはかなりのショックで、生涯無実である憤懣を秘めていた。」⁽⁶⁵⁾ それも、「男色」「醜交」という新聞報道。家庭内、学内、それに社会一般での反応を想像しただけで、悍ましい。

寄宿舎を出てからの小津は、別人となった。中学2、3年頃と比べれば、置塩に言わせれば、「悪く云えば乱暴そのもの、よく云えば青春の奔騰とも称すべき状態」に陥った。⁽⁶⁶⁾ 羞恥心、必死に打ち消そうと虚勢を張ったのかも知れない。

成績も低迷した。一学期の期末試験が受けられず、素行は最低の「丁」がついている。これでは高校受験もうまくいくはずはない。案の定、「相当の自信を持っていた」にもかかわらず神戸高商と名古屋高商は受験したものの、不合格。いじめられていた下級生は喜んだ。⁽⁶⁷⁾

「松阪から通っている群の中に、こわい5年生がいた。時々、腕力をふるうこの暴君、旧制名古屋高工を受験、見事にすべった。いつもいじめられていた下級生は、やんやのかっさい。小津は進学をやめて松竹へは行って行った。」⁽⁶⁸⁾

事件の影響で、噂はしきりで、小津は凶暴化し、下級生は近寄らなくなり、成績も低迷し高校受験に失敗し、それを下級生が喜ぶといった傾向は、いくらバンカラ気質だった小津にしても、耐えがたいものだったではあるまいか。そうした冷たい社会から遮断された空間として、小津が映画館に逃げ込んだとしても、その心理はよく理解できる。小津の『日記』にしても、日記らしい記述は6月19日までで、後は、映画関係の簡単なメモに変化している。⁽⁶⁹⁾ そのま

ま、学問への関心は失われていった。その後浪人したにもかかわらず、再度の三重県師範学校受験にもかかわらず、高校への道は拓けなかった。小津は生まれて初めて人生のがけっぷちに立たされていた。

どん底を救ったのは、松阪市の中心部から30キロ南西に位置する三重県飯南郡宮前村（現在松阪市飯高町）で尋常高等小学校の代用教員を務めており、ちょうど新しい就職先が決まった奥山だった。彼が自分の後任として小津を代用教員になる道を拓き、その後、それが映画監督への分岐路となった。小津の代用時代の教え子の米村勝次によると、宇治山田中学へ進学した彼が先輩に聞くと、先輩は、「当時の小津が、綺麗な娘のいる友達の家へ遊びに行っていて、それを妬んだ生徒が密告したことによると話した」という物語、伝説がすでに作られていた⁽⁷⁰⁾。ただ少なくとも、3年後まで「稚児事件」の余震は続いていたということになり、その意味からも、大した事件ではなかった、とは言えない。

この稚児事件で、小津の人生は一変した。たしかに、映画館に通うことになり、映画人生の扉が開いたものの、進学の道が閉ざされ、学歴は中学卒業にとどまった。そして、これ以降彼のセクシュアリティに関する沈黙が支配することとなった。小津の異常なこだわりなど、作品制作に作用したものがあるかも知れない。辛い現実には直面した時、それに向き合ったり、落ち込むのではなく、むしろそれには目をつむり、ないしは逃避し、映画のような楽しい世界に逃げ込む、という逃避指向は、戦争に対しても、「死」に対しても、その後の一貫した小津の姿勢だったように見える。

おわりに

小津作品の中で、小津自身が「男の契り」が直截に表現された箇所は、管見の限り、一か所だけ見受けられる。1959年公開された小津映画『浮草』は、アメリカ映画の『煩惱』（1928年）を下敷きにされた作品といわれ、松竹の小

津自身が唯一大映のスタッフを使って製作された作品である。1934年上映されこの歳のキネマ旬報で1位を獲得するほど好評だった無声映画『浮草物語』のリメイクでもある。

最初のシーンで、嵐駒十郎（中村鴈治郎）率いる旅芝居の一座の乗った船が三重県鳥羽の港に着く。実は駒十郎はこの街で一膳飯屋を営むお芳（杉村春子）との間に子をもうけている。12年ぶりにお芳を訪ねると、息子の清（川口浩）はすっかり大きくなり、2年前に高校を卒業して郵便局でアルバイトをしながら上の学校を目指して勉強している。清は母から父は死んだと聞かされて育ち、駒十郎を母の兄だと信じ込んでいるので、実の父を「おじさん」と呼んで再会を喜ぶ。

清は、夜は「おじさん」の芝居を見、昼は二人で釣りをしながら語りあうなどして駒十郎と親しく交わる。駒十郎の連れ合いで一座の看板女優でもあるすみ子（京マチ子）はそんな駒十郎を不審に思い、帰ってきた親方に、「何をしよったん」と詰問する。

・・・駒十郎「釣りやがなあ。」

すみ子「そお。－誰やの？一緒に行った若い人って？」

駒十郎「ウ？－アア、ごひいきさんのほんほんや」

すみ子「郵便局の人やって？」

・・・

すみ子（探るように）「なんぞあンのとやろ？おかしいわ」

駒十郎「何がや？」

すみ子「・・・とほげとんのと、違うんか？」

駒十郎（初めて気がついたように、わざととほけて）「何がイ。アア、そうか、お前、妬いとんのか、アハハハ、阿保らしイ。やめとけ、やめとけ、お前がおるのに。・・・そんなことでけるかいな、阿保らしイ。この年して。若い時と違うがな。わかっとるやわな。わかっとるやろ・・・」

すみ子「ふん・・・うまいこと言うて。」・・・⁽⁷¹⁾

父と息子とは知らずに、連れ添いの女性は2人の男性の親密な関係に嫉妬している。親方は「ぼんぼん」との関係を一概に否定せず、若い時だったらあった、かのように仄めかす。

ここでは、小津が「同」なのか「異」なのか、を論じることはしない。むしろ境界を設けずグレイな領域の中にクリアな世界の可能性を見出そうとする。いずれにせよ、「稚児事件」の経験がなかったら、「監督 小津安二郎」はおそらくは誕生していない。これから彼は、屈折の歴史を始める。

注

- (1) 佐藤忠男『完本 小津安二郎の芸術』朝日新聞社 2000年 131頁
- (2) 井上和男編・著『陽のあたる家』フィルムアート社 1993年 114頁。この本は、井上を監督とし1983年製作された『生きてはみたけれど・小津安二郎伝』の作成の過程での取材が基にされている。
- (3) 小津安二郎松阪記念館所蔵資料
- (4) 中村博男『若き日の小津安二郎』株式会社キネマ旬報社 2000年 86頁。小津の資料蒐集に大きな功績を残した田中眞澄にとっても、稚児事件は最後までこだわったテーマだったが、謎のまま終わった。田中眞澄『小津安二郎と戦争』みすず書房 2005年 21-35頁
- (5) 田中 前掲書 26頁
- (6) とくに、伊勢時代の小津安二郎の軌跡を丁寧に追いながら、戦争との関連、小津映画の評論、小津映画史など、豊富な内容を丁寧に蓄積したものとしては、藤田明著、倉田剛編『平野の思想 小津安二郎私論』ワイズ出版 2010年 があげられる。そこにも主な研究文献があげられている 548-550頁。他に、松浦莞二、宮本明子『小津安二郎大全』朝日新聞社 2019年 506-507頁にも参考文献リストがあげられている。最近の「男色」の通史研究としては、山口志穂『オカマの日本史』ビジネス社 2021年がある。
- (7) 花房四郎『軟派十二考第4巻 男色考』文藝資料研究会編集部 1928年 73-74頁。

紀田順一郎監修・解説『精選社会風俗資料集 第6巻 軟派十二考』クレス出版 2006年所収（本稿では、漢字は基本的に新字体で統一して記載する。）多くの研究者はその「衰退」を指摘している。「江戸時代末期において下火となりつつあった衆道の気風が明治期に入って再び盛り返すのは、中央政府を握ったのが薩摩閥によるところが大きいとも言われている。薩摩、時代下って鹿児島県には、名高き「郷中制度」をはじめとして、男色のエピソードに事欠かない。」叶誠人『軍隊と男色：カストリ雑誌に残された帝国軍人の記録』Kindle版 No.123-125。稲垣足穂も『少年愛の美学』で「[男色は天保の改革以後]、衰退の途（みち）を辿っていたところ、明治維新となって、四国九州の青年らによって彼らのお国ぶりが、京都や東京にもたらされた」と言う。（『稲垣足穂全集第4巻 少年愛の美学』筑摩書房 2001年 26頁）

- (8) 森鷗外『キタ・セクスアリス』新潮社 1949年 32頁。森鷗外の『キタ・セクスアリス』は、1909年（明治42年）に発表された自伝的小説で、題名 *vita sexualis* はラテン語で性欲的生活を意味する。森鷗外の作品の中では異色で、主人公の哲学者・金井湛（かねい・しずか）が、高等学校を卒業する長男への性教育のための資料として、自らの性欲的体験について語る、という設定になっている。大胆な性欲描写が問題となり、鷗外は自分の上官陸軍次官石本新六から懲戒され、掲載された文芸誌「スバル」7号は発刊から1か月後に発売禁止の処分を受けた。

この研究領域では、「学生男色」の概念を用いながら、明治期の寄宿舎を中心とした前川直哉の功績が大きい。前川直哉『男の絆』筑摩書房 2011年。「明治期における学生男色イメージの変容」『教育社会学研究』81(2007) 5-23頁。近代日本の男子学生と「男色」：1900年代の変容を中心に（IV-1部会 ジェンダーと教育，研究発表IV，日本教育社会学会第58回大会 2006-09-22）日本教育社会学会大会発表要旨集録 271-272頁。「日本社会と『男の絆』」京都大学新聞 2013年5月1日

- (9) 『キタ・セクスアリス』 32頁-33頁
 (10) 花房四郎 前掲書 76頁
 (11) 禾鳥生『鹿児島自慢』日本警察新聞社 大正4年 88頁
 (12) 『キタ・セクスアリス』 36頁
 (13) 森鷗外『キタ・セクスアリス』をはじめ、坪内逍遙『当世書生気質』、徳田秋声『思い出るまま』、巖谷小波『五月鯉』、内田魯庵『社会百面相』、白洲正子『両性具有

の美』などに広く登場する。

- (14) 鈴木彰、笠間千浪『現代語訳 賤のおだまき』平凡社 2017 年
- (15) 伊牟田経久『武士道と男色物語—『賤のおだまき』のすべて』小径選書 2020 年 174 頁
- (16) 河岡潮風「学生の暗面に蠕れる男色の一大悪風を痛罵する」『冒険世界』第 2 巻第 9 号 博文社 1909 年。礫川全次編『男色の民俗学』批評社 2003 年 47-66 頁。明治 30 年代は「男色」に限らず、性の問題が多発し、「学生風紀問題」と呼ばれた。渋谷知美「『学生風紀問題』報道にみる青少年のセクシュアリティの問題化」『教育社会学研究』第 65 集 1999 年 25-47 頁。日本における男性史研究のリーダー加藤千香子は研究史を踏まえながら、「これらの研究から、明治 30 年代—1900 年前後～10 年代の時期においてジェンダー・セクシュアリティにかかわる『再編成』がなされ、同時に『同性愛』などの差異が問題視されていく過程がみてとれる。ジェンダー・セクシュアリティの問題は、まさに同時代に画期を見る『国民』や『家族』のイデオロギー、またその他の多様な『差異』の構築とのかかわりで論じていくことが求められよう」という評価に到達する。(加藤千香子「統合と差異を問う視点——世紀転換期研究の新たな課題を探る」『女性史学』16 号 2006 年 126 頁)
- (17) 綿貫六助は、軍機祭りでの不祥事がもとで陸軍を去らなければならなくなったが、その不祥事というのは、「連隊旗手の時、老連隊長と契りを結び、連隊長が美少年従卒を可愛がり、彼を袖にしたことから嫉妬、ピストルで連隊長を射殺しようとした。あるいは、軍旗祭で連隊長と口論、連隊長をなぐりつけた。』『風雷』119 号 104 頁
- (18) 『里見弴全集』第 1 巻 昭和 52 年 筑摩書房 88 頁
- (19) 志賀は里見を「事実の内容に比して書かれた内容が余りに無意味であまりに貧弱」と批判している。「モデルの不服」本多秋五『初期白樺派文学集』筑摩書房 1973 年 113-115 頁) 志賀自身の男性に対する想いは、「基督教に接する以前に男同士の戀で度々経験した事」と認めている。(志賀直哉『濁った頭』本多秋五 同掲書 100 頁)
- (20) 菊池は中学校 5 年生の時、4 歳年下の渋谷彰に多くの恋文を出している。菊池の渋谷彰宛での「恋文」に関しては、杉森久英「恋文」『小説菊池寛』中央公論社 1987 年 7-49 頁。マント事件に関しては、「青木の出京」で小説の形をとって菊池自身

が叙述している。（『中央公論』33(12)(363)1918年11月号58-85頁）その後、片山宏行「菊池寛・マント事件の位相：長崎太郎宛書簡を基点として」（『青山語文』26(1996.3)189-201頁）で分析される「書簡」では、唯一真実を伝えた親友長崎が他言したことに対する憤懣が吐露されている。

- (21) 大杉自身の『自叙伝』には、「幼年学校時代」の記述として、「僕は第一期生の『仲間』と一緒に、外套を頭からかぶって第二期生の左翼の寝室を襲ふた事もあった。又第二期生の『少年』をちょいちょいからかった事もあった。そんな事は古参生たる第二期生共には非常な憤慨であったに違ひない。そして其の少年の一人のいた石川懸人共が、先づ僕を目の仇にとしだした」（大杉栄『自叙傳・日本脱出記』岩波書店1971年103頁）とある。中村中に関しては、同上 99-100頁。

ちなみに、大杉を惨殺することになる甘粕正彦（1891-1945）も、小学校時代一時期ひと回り上ながら小津と同じ空間である三重県宇治山田に通い、中学校も津中学校卒業だった。

- (22) 『九州日日新聞』大正2年7月20日号。九州日日新聞は現在の熊本日日新聞の前身で、昭和17年3月に終了した。
- (23) 川端康成『川端康成全集第14巻 独影自命・続落花流水』新潮社1970年 28頁
- (24) 川端研究者林武志が『「伊豆の踊子」成立考』の中で、小笠原の実在を確認し、写真を著書に掲載し、小笠原本人にもインタビューするなど、丁寧に追求している。（林武志『川端康成研究』桜楓社1976年）
- (25) 「少年」川端康成『川端康成全集第10巻』新潮社1980年 161頁。その後、『少年』の文庫本も刊行されている。『少年』新潮文庫2022年
- (26) 川端康成『川端康成全集第14巻 独影自命・続落花流水』新潮社1970年 29頁。1952年に完結する新潮社版『川端康成全集』全16巻の編集担当は若倉雅郎であったが、彼が進藤純孝の名前で出した川端の伝記でも、『少年』が、どこまで事実で、どこまで創作かは「判じ難い」としつつも、「19歳の川端が、同質の少年に『人生で出会った最初の愛』と言へるほどの気持ちを抱いた音は間違ひないやうに思へる」と言う。（進藤純孝『伝記 川端康成』六興出版1976年 75頁）

その他、最近の川端研究としては、小谷野敦『川端康成伝 双面の人』中央公論新社 2013年、板垣信『川端康成』（新装）清水書院2016年、坂元さおり「川端康成『少年』論：過去の＜記録＞と再語り」『昭和文学研究』第40巻（2000年

3月) 64-75頁参照。

- (27) 「上級強姦を強ゆ」『衛生新報』1906-33 明治39年2月10日号 2面
- (28) 井上みなと『明治・大正・昭和の男色』Kindle版 p.40
- (29) 1910年3月23日『朝日新聞』(東京)朝刊5面
- (30) 1911年2月23日『朝日新聞』(東京)朝刊5面
- (31) 1909年12月25日『朝日新聞』(東京)朝刊5面
- (32) 花房四郎 前掲書 76頁
- (33) 1905年3月16日『朝日新聞』(東京)朝刊6面
- (34) 田中祐「明治期の新聞言説における鶏姦罪—批判的言説分析を方法論として—」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』24-2(2017年)、197-207頁
- (35) 斉藤巧弥「明治期の新聞における『鶏姦』報道の特徴：『読売新聞』と『朝日新聞』の分析から」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24(2017年)、21-38頁。
- (36) 『宇治山田高校90年史』三重県立宇治山田高校 1989年
- (37) 岩田準一『本朝男色考・男色文献書志(合本)』原書房／2002年、岩田、江戸川乱歩、南方熊楠が戦前日本の男色研究の三傑であった。
- (38) 中村精貳「岩田準一のこと」『鳥羽志摩の民俗 志摩人の生活事典』鳥羽志摩文化研究会、1970年4月15日、329-333頁。
- (39) 小津安二郎松阪記念館所蔵資料
- (40) 中村寅松(第8版)名古屋大学『人事興信録 データベース』
<https://janis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-16072>
- (41) 佐藤忠男 前掲書 130頁
- (42) 槌賀記念事業会『槌賀先生喜寿祝賀文集 感想文集』1965年
- (43) 槌賀記念事業会 前掲書 77-78頁
- (44) 槌賀記念事業会 前掲書 79頁
- (45) 本人自身が「シツケ」について「これにつき思い出すことは、私の教員生活の大部分が舎監生活であった。山田中学に於て県が寄宿舎生の成績をみとめ新しい一棟を増築して、市内の者までも進んで入舎させ、私独特のシツケ教育の実践書たらしめてくれた実例がある。」と書いている。(槌賀記念事業会 前掲書 22頁)
- (46) 井上和男編・著 前掲書 114頁-115頁。晩年の小津映画『秋刀魚の味』に登場する、いささか品性にかけて、貪欲で遠慮を知らないヒョータン先生は、おそらく

槌賀がモデルとなっており、それを小津は東野英次郎に演じさせている。

置塩高によれば、「毎年、小津作品が封切られた後に、私たちは関西で集まるのが例で、彼もそれを楽しみにしていましたが、「東京物語」の封切後でしたか、有馬に集ろうという時のこと、もう四十年も経っているのだから、小津と、Tさんを逢わせようというはかりごとをめぐらしました。しかし彼は、「Tさんが出てくるんなら俺は出ない」と云い張り、私たちを困らせました。その時、彼が云うには「Tさんには恨み骨髄だが、そのT先生がもし打ちしおたれた老体を俺の前に現わしたら、俺は困るんだ」——小津はそういう人間だったのです。』『改定新版小津安二郎・人と仕事 上』小津安二郎学会 2022年 60頁。小津が映画監督になった後1933年1月14日の小津の日記にも「槌賀安平氏よりの久々の手紙にせつす 勝手なときに手紙などの書ける男は徳也」とある。（田中眞澄編『全日記小津安二郎』フィルムアート社1993年 30頁）

- (47) 小津安二郎「宇治山田で学んだ頃」『高校コース』1956年2月号 58頁。
- (48) 宇治山田中学校校友会の会誌『校友』（大正11年1月発行）
- (49) 田中 前掲書 24頁「僕自身には勉強に対する興味があまり湧いてこなかった。いくぶん乱暴者の傾向があったので、にらまれていたんではないかと思う。」（小津安二郎「宇治山田で学んだ頃」『高校コース』1956年2月号59頁）と小津は言うが、最初からではなかった。
- (50) 中村 前掲書 78-79頁
- (51) 大正7年3月10日『小津安二郎松阪日記 大正7年・10年』松阪市 2022年
- (52) 中井助三「中学生時代」『改定新版 小津安二郎・人と仕事 上』小津安二郎学会 2022年 57-58頁
- (53) 中村 前掲書 79頁
- (54) 1920（大正9）年7月26日付 三重県版『読売新聞』。中村はこの読売新聞の記事を基に論じている。（中村 前掲書 89頁）
- (55) 1920（大正9）年7月26日付『名古屋新聞』。田中もこの名古屋新聞を直接上げてはいるものの、分析はしていない。田中 前掲書 21頁。記事の中に小津の名前は見当たらない。また田中が言うように、最上級生である小津が「退学ではなく停学で済んでおり、また彼自身は冤罪を確信していたところからも、事件の主役とは考えにくい。」（田中 前掲書 22頁）と言うが、父親は冤罪だとは一言も言っ

ていない。逆に当時の上下関係やこれまで述べてきた「構造」の中で、小津が冤罪だったとは考えにくい。

- (56) 「男色に就て」ドクトル宮田守治、中央看護婦会長松本安子『男女生殖健全法』（東京中央看護婦会蔵版）中央看護婦会 明治 33 年 98 頁
- (57) 中村 前掲書 85-86 頁
- (58) 藤田 前掲書 17 頁
- (59) 中村 前掲書 86 頁
- (60) 小津安二郎記念館所蔵資料。また、岩田の弟の貞雄氏に矢野氏はインタビューを行なっているが、それによれば「また、7月20日鳥羽の森井に頼まれて、岩井準一は校長に会いに行った」ということである。（小津安二郎記念館所蔵資料）
- (61) 井上和男編・著 前掲書 77 頁
- (62) 同上
- (63) 中村 前掲書 87 頁「あの事件で小津は期末試験を受けられなかったはず。処分されて小津は、関西学院の中等部に転向することを真剣に考えていた。ところが、『夏休みがすぎたら出てくるように』と学校側が言うてきたので、それはやめになった」（藤田 前掲書 20 頁）処分は解除されたが、寄宿舎からは追放され、松阪から山田まで汽車通学をしなければならなくなった。
- (64) 大正 10 年 1 月 27 日『小津安二郎松阪日記』 106 頁
- (65) 「小津安二郎一人と仕事一」429 頁
- (66) 田中 前掲書 26 頁
- (67) 田中 前掲書 27 頁
- (68) 2 年後輩で、三重県で観光会社の副社長を務めた藤原実の回想。『母校の人物風土記一第 1 集一』伊勢新聞社 1975 年 37 頁。田中眞澄は、「下級生からの評判など、従来の小津伝説を多少修正すべき事実かも知れない」（田中 前掲書 25 頁）と言う。
- (69) 『小津安二郎松阪日記』 145 頁。
- (70) 中村 前掲書 88 頁
- (71) 井上和男編『小津安二郎全集 下』新書館 2003 年 384-385 頁

本稿は、科学研究費助成事業 基盤研究（C）（一般）課題番号 21K00949 の成果発表である。